山形県内出土円面硯について

今時調査において、10個体の円面硯が出土した。山形県内において円面硯がこれほどまとまって出土したのは西町田下遺跡が初めてである。その意義を考察するために必要な円面硯の基本的属性と県内出土例について、以下に概述する。

(1)概説と研究史

円面硯は中国で発明された文房具である。日本の円面硯は古代中国に源流を求めることができる。5世紀頃、中国ないし朝鮮半島を経由して伝来したと考えられる。隋・唐時代に隆盛を極めた陶硯の形式である円面硯が我が国にもたらされ、基本形となったと思われる。

律令制の浸透とともに文字の使用が盛んとなり円面硯も全国的に普及していった。6世紀末から7世紀初頭頃には大阪府陶邑窯跡群や京都府隼上り窯跡で円面硯が生産され官衙や寺院に供給されている。「刀筆の吏」といわれるように、木簡・筆・刀子・墨そして円面硯が官吏の必需品となり、律令政治を支えていったのである。官衙跡からの出土が多いことがそれを裏付けている。円面硯などの硯が出土する遺跡ということは、これら硯を日常的に使用していた官吏が存在していたことを示している。

考古学的な見地からの陶硯研究は、昭和19年の内藤政恒氏による「本邦古硯考」から始まる。その後出土資料が増大するに伴い、楢崎彰一氏の「古代陶硯に関する一考察」・「日本古代の陶硯について」、石井則孝氏の「日本古代文房具史の一面」などの研究により、形式分類や編年等が示されている。ついで吉田恵二氏の「日本古代陶硯の特質と系譜」や、杉本宏氏の「飛鳥時代初期の陶硯」などがある。昭和58年には奈良国立文化財研究所により「陶硯関係文献目録」がまとめられている。また、横田賢次郎氏が「福岡県内出土の硯について」で、太宰府を中心とした福岡県内出土陶硯の分類と編年を試みている。最近では、平成7年大阪府立近つ飛鳥博物館が秋季特別展「古代人名録」で、円面硯のみならず陶硯全体を含めた編年をまとめている。

山形県内においては、昭和47年、伊藤忍氏の「山形県内出土の陶硯」により集成・分類が行われている。また、村山正市氏は昭和63年の「山形県における奈良・平安時代の陶硯をめぐって」において、山形県内出土陶硯の分類と編年を試みている。しかしながらこれらの研究の中心となるものは、風字硯と転用硯であり、円面硯に至っては数点に過ぎなかった。陶硯自体の出土する遺跡も限られていたことが要因となっており致し方のないことであった。1980年代後半から大規模開発の増大により、山形県内でも陶硯の発掘例が増加している。ほぼ全県的に出土しているが、その傾向を概観すると、庄内地方では、圃場整備など大規模に発掘調査された遺跡が多い飽海地方に出土が集中している。特に城輪柵跡を中心にした北部で風字硯が数多く出土し、形象硯である鳥形硯も、城輪柵跡で1点確認されている。しかし、飽海地方南部では、風字硯に混じり円面硯が出土しており、様相を異にしている。内陸では、置賜地方に集中しており、円面硯の出土例も多い傾向がある。

(2)円面硯の概念

出土する円面硯の分類については前述諸氏の論考を参照しなければならないが、用語及び基

準等について統一されていないのが現状である。したがって、本報告書では奈良国立文化財研究所の「陶硯関係文献目録」による分類に概ね従うこととした。それによると円面硯は、硯面が円形であって陸が中央にあり、その周囲を海が取り巻いた形態をとる一群となっている。また、陸には平面型・凸型・凹型・山型がある。さらに、内堤・外堤の有無や圏脚部の形態等により細分されている。県内で出土した円面硯を以下に分類した。

A、圏脚円面硯……輪状の圏脚を有する一群で、圏脚に「透かし」が穿たれているものと無いものがある。また、中には圏脚部が著しく低い一群がある。

B、無脚円面硯……圏脚部のない円面硯。

C、中空円面硯……内部が中空となっている一群である。これには坏や皿、高台付坏等の口縁部上面を硯面で遮蔽した「坏皿型」と、把手付中空円面硯で、堤瓶を横にして体部片面を硯面としたような「堤瓶型」がある。

なお、三脚ないしそれ以上の獣脚が付く多脚円面硯や蹄脚円面硯、亀首形把手付中空円面硯等は、県内では今のところ未検出である。

以下、出土遺跡毎に概観していくことにする。

(3)山形県内出土円面硯の概要

1．俵田遺跡

飽海郡八幡町に所在する。竪穴住居跡1棟、掘立柱建物跡8棟、矢板列などの他に、祭祀遺構がそのままの状態で出土し、人面描画土器をはじめ人形・刀形・馬形等の木製品が出土している。

円面硯(53-1)は、第1次調査で出土したもので、圏脚円面硯である。口径12.5cm、底径16cm、器高6cmを測り、内堤、外堤を有する。硯面形態は平面型である。圏脚部に縦長方形の透かしを有し、篦描きで圏脚部上下に巡る横位沈線とそれに挟まれた縦位沈線が巡る。8世紀前半と考えたい。

2．生石2遺跡

酒田市生石に所在する。北方約5kmに城輪柵跡がある。板材列に囲まれ計画的に配置された掘立柱建物跡群が検出されている。

円面硯は6個体出土しており、すべて圏脚円面硯である。1点(53-2)は、口径14.6cmを測り、外堤のみを有する。硯面形態は山型である。圏脚部に縦長方形の透かしを有し、篦描きで圏脚部上部に横位沈線が巡り、その上部に菱形沈線文が巡る。もう1点(53-3)は、低い内堤を有し、外堤は剝離している。硯面形態は平面型である。圏脚部は欠損しており不明であるが、圏脚部肩部に篦描きで横位沈線が巡りその上部に格子沈線文が巡る。他は小破片であるが、圏脚部に縦長方形の透かしを有し篦描きで斜線と横位及び縦位の沈線があるもの(53-4)、圏脚部に円孔の透かしを有し篦描きの縦位沈線が巡るもの(53-5)、圏脚部に縦長方形の透かしを有し篦描きの斜格子沈線文が巡るもの(53-6)、圏脚部に篦描きの木葉状沈線文が巡るもの(53-7)がある。8世紀中頃から後半と考えたい。

3．南興野遺跡

酒田市南興野に所在する。北北東約4㎞に城輪柵跡が位置する。掘立柱建物跡10棟、井戸跡4基等が検出された。

円面硯(53-8)は、包含層Ⅲ層からの出土で圏脚円面硯である。口径8.5㎝、底径12㎝、器高3.9㎝を測り、外堤のみを有する。硯面形態は凸型で、平坦な陸部の周囲をやや狭い海が巡っている。圏脚部には透かしが無く、篦描きの連続山形沈線文が3条巡っている。8世紀後半と考えられる。

4．山楯5遺跡

飽海郡平田町山楯地内に所在する。酒田東部丘陵に点在する窯跡群の1つである。半地下式登窯1基などが検出された。

円面硯は2個体で、いずれも圏脚円面硯である。灰原からの出土である。1点(53-9)は、内堤と外堤(剝離)を有し、口径12㎝、底径15.5㎝、器高5.2㎝を測る。硯面形態は平面型である。圏脚部には横長方形と方形の透かしを2対有し、篦描きの木葉状沈線文がある。もう1点(53-10)は、圏脚部片のみで、硯面形態は不明である。底径13.5㎝を測る。圏脚部に逆五角形の透かしを有し、篦描きの木葉状沈線文がある。2点とも8世紀中葉と考えられる。

5．桜林興野遺跡

飽海郡平田町桜林興野に所在する。東約2㎞に山楯5遺跡、北東約1.5㎞に生石2遺跡がある。隣接して郡山という集落があり、郡山付近を飽海郡衙擬定地とする説もある。

掘立柱建物跡や土壙などが検出されている。

円面硯は3個体出土しているが、いずれも圏脚円面硯の破片である。1点目(54-1)は、圏脚部下部に篦描きの横位沈線1条が巡りその上部に縦位沈線が巡っている。透かしの有無は不明である。2点目(54-2)は、圏脚部下部に篦描きの横位沈線が2条巡る。透かしの有無は不明である。3点目(54-3ABC)は、圏脚部下部に篦描きの横位沈線が3条巡り、縦長方形と菱形の透かしを有する。

6．荒沢窯跡

鶴岡市荒沢に所在する。半地下式登窯跡数基が検出されている。

円面硯は、立正大学が調査した際、出土したと伝えられているが、詳細は不明である。

7．不動木遺跡

東村山郡河北町不動木に所在する。竪穴住居跡8棟、掘立柱建物跡2棟等が検出されている。

円面硯は1個体(54-4)で、圏脚円面硯である。口径10.6㎝、底径18.4㎝、器高5.3㎝を測る。硯面形態は平面型で、外堤のみを有する。圏脚部には縦長方形の透かしを有し、透かし間に五角形沈線文2個が巡る。圏脚部下部に1条の横沈線が巡っている。8世紀中葉と考えられる。

8．平野山古窯跡12地点

寒河江市柴橋に所在する。一帯には窯跡が多数点在している。斜面に沿って数基の半地下式登窯跡と灰原が検出されている。

円面硯は6個体出土している。すべて圏脚円面硯である。1点(54-5)は、口径14cm、底径17.8cm、器高6.4cmを測る。硯面形態は平面型で、外堤のみを有する。圏脚部には縦不整方形の透かしが6単位穿たれると推定される。圏脚部に箆描きで縦位沈線が巡っている。硯面には金属器によると見られる削り痕が明瞭に残る。造りはやや粗雑である。8世紀後半代と考えられる。もう1点(54-6)は、口径8.4cmで、内堤と外堤を有す。圏脚部は破損している。硯面形態は平面型である。他の4点は、いずれも硯面部の破片である。うち1点は外堤のみを有するものであるが、他は内堤と外堤を有する。硯面形態はすべて平面型である。1点のみ、圏脚部に箆描きの縦位沈線が確認できる。

9．高瀬山遺跡Ⅰ期

寒河江市高瀬山に所在する。旧石器時代から中世までの遺構・遺物が数多く出土する大規模な遺跡である。古代長岡郷の中心集落という説もある。

円面硯は1点(54-7)で、圏脚円面硯である。SK1015から出土している。口径11.4cm、底径13cm、器高5.3cmを測り、内堤と外堤を有する。硯面形態は平面型で、かなり磨滅している。圏脚部には直径7mmの円孔3個が4単位穿たれていると推定される。造りは大変丁寧である。8世紀前半と考えられる。

10．高瀬山遺跡市道部分

前述の高瀬山遺跡を横切る市道部分である。寒河江市教育委員会により発掘調査が実施された。

円面硯は1点(54-8)で、圏脚円面硯である。SD1からの出土である。口径15cmを測り、内堤と外堤を有す。硯面形態は平面型で、使用痕はほとんどない。圏脚部には、直径11mmの円孔3個が三角形に穿たれ、4単位巡ると推定される。プロフィールが前述の高瀬山遺跡Ⅰ期出土円面硯(54-7)に極めて似ることから、同一工人によるものの可能性も考えられる。8世紀前半と考えられる。

11．久保手窯跡

上山市久保手に所在する。上山市教育委員会により発掘調査が実施された。重複する半地下式登窯跡2基と土壙1基などが検出されている。1号窯跡が廃棄された後、2号窯跡へ移行している。

円面硯は2号窯跡からの出土で、2点の小破片であり詳細は不明である。報文では2号窯跡を9世紀初頭としている。

12．上野山古墳群

南陽市上野字狸沢に所在する。南陽市教育委員会により発掘調査が実施された。一帯には古墳群が分布している。弥生時代から古墳時代終末期の遺物・遺構が検出し、横穴式石室1基も遺存している。

円面硯(54-9)は、中空円面硯である。口径23cm、底径23cm、器高6.6cmを測る。低い外堤を有し、硯面の周囲をごく浅い海部が巡る。硯面形態は凸型である。体部上下端部及び底部端部に櫛描波状文が巡る。体部中央部に、中空の把手が剝離した痕跡を残す。堤瓶を横に

したような形態を呈する把手付中空円面硯である。東北地方では、福島県鳥打沢A遺跡に類例があるのみで、2例目となる。大型の優品である。7世紀中葉の可能性がある。

13．沢田遺跡

南陽市島貫に所在する。南陽市教育委員会により発掘調査が実施された。置賜郡衙の擬定地とされている地域でもある。

円面硯(54-10)は、無脚円面硯である。口径9.5cm、底径9cm、器高1.6cmを測る。硯面の周囲を低い海部が巡り、陸部中央部が僅かに窪む。硯面形態は凸型である。群馬県上渕名遺跡出土のものに類似する。

14．長岡山遺跡

南陽市長岡に所在する。南陽市教育委員会により発掘調査が実施された。

円面硯(54-11)は、圏脚円面硯である。口径は9.6cmを測り、外堤のみを有し突帯がやや内弯して巡っている。圏脚部は破損しているが、やや開く形と推測される。

15．味噌根窯跡

東置賜郡高畠町大字安久津に所在する。山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館により発掘調査が実施された。2基の窯跡が検出されている。周辺には、安久津古墳群などの古墳群が点在し、南1.5kmには小郡山の集落があり、置賜郡衙の擬定地とされている。

円面硯は2点有り、2号窯跡から出土している。1点(54-12)は圏脚円面硯で、圏脚部の低い低脚円面硯といえるものである。口径13cm、底径14.5cm、器高3.6cmを測り、外堤のみを有し、突帯が巡る。硯面形態は、陸部中央が高く周囲が低くなり海部を形成する山型である。岐阜県長者原遺跡、奈良県藤原京出土のものに類似する。8世紀前半と考えられる。もう1点(54-13)は、圏脚円面硯である。口径10cmで内堤と外堤を有し、硯面形態は凹型である。圏脚部は破損している。

16．大在家遺跡

東置賜郡高畠町大町に所在する。高畠町教育委員会により発掘調査が実施された。近くには置賜郡衙擬定地である小郡山の集落がある。

円面硯は3個体出土している。すべて圏脚円面硯である。1点(54-14)は、内堤と外堤を有し、口径9.8cmを測る。硯面形態は凸型である。圏脚部端部が欠損しており、底径・器高は不明である。圏脚部には縦長方形の透かしを有する。箆描きで圏脚部上下に巡る横位沈線と格子状沈線文が巡る。7世紀末の可能性がある。もう1点(54-15)は、外堤のみを有し、突帯が周囲を巡っている。口径9cm、底径13.4cm、器高4.9cmを測る。硯面形態は平面型であるが、硯面端部に長径2.8cm、短径2.4cm、深さ1.2cmの墨溜状凹部が付属している。圏脚部には縦長方形の透かしを有し、透かし間に箆描きで縦沈線文2条巡っている。類例は、茨城県鹿の子C遺跡、山形県高畠町合津窯跡等がある。組み合わせ硯といえるものである。8世紀前半と考えられる。もう1点(54-16)は、圏脚部の破片である。圏脚部に箆描きの縦位沈線が見られる。

17．合津窯跡

東置賜郡高畠町和田に所在する。高畠町教育委員会により発掘調査が実施された。須恵器坏、蓋等を焼成した窯跡が検出された。

円面硯は2点有り、すべて圏脚円面硯である。1点は、口径約17㎝で、内堤と外堤を有し大型品である。硯面形態は平面型である。圏脚部には、篦描きで三条の連続山形沈線文が巡る。また、圏脚部上部に墨溜状凹部が剝離した痕跡が見られる。もう1点は、口径約17㎝を測り、内堤と外堤を有す大型品である。硯面形態は平面型である。圏脚部には、縦長方形の透かし3個と篦描きの縦位沈線5本が組み合わされたものが4単位巡る。やや古い形態と思われ、7世紀末の可能性もある。

18．笹原遺跡

米沢市中田町に所在する。米沢市教育委員会とまんぎり会により発掘調査が実施された。竪穴住居跡や溝跡などが検出されている。

円面硯は3個体出土している。1点(54-17)は、無脚円面硯である。ST 8から出土した。口径9.5㎝、器高1.8㎝を測り、内堤と外堤(剝離)を有する。硯面形態は平面型である。もう1点(55-1)は、圏脚円面硯である。SD 3で出土した。口径13.8㎝、底径22㎝、器高7㎝を測り、内堤と外堤(剝離)を有する。圏脚部には直径1.7㎜程の円孔が巡り、円孔間に篦描きの木葉状沈線文が配される。8世紀後半と考えられる。もう1点は、小破片のために詳細は不明である。

19．大浦B遺跡

米沢市中田町大浦に所在する。米沢市教育委員会が発掘調査を実施した。計画的に配置された掘立柱建物跡や溝跡・土壙などが検出された。「延暦23年」の銘がある漆紙文書が出土している。置賜郡衙擬定地とされている。

円面硯は2個体出土している。すべて圏脚円面硯である。1点(55-2)は、圏脚部片の出土である。DY146土壙から出土した。底径17.5㎝を測る。圏脚部には、縦長方形の透かしを有し、透かしの間に篦描きで縦位沈線文が1本ある。報文では8世紀末としている。もう1点は、圏脚部に円孔の透かしを有するものであるが、小破片のため詳細は不明である。

20．西町田下遺跡

米沢市塩井町塩野に所在する。竪穴住居跡19棟、掘立柱建物跡9棟、河川跡、溝跡、井戸跡2基など多数の遺構を検出した。近くには置賜郡衙擬定地とされる大浦B遺跡がある。

円面硯は10個体出土している。中空円面硯と圏脚円面硯である。

中空円面硯は2点ある。1点(55-3)は、SK2079拡張トレンチから出土した。口径11.8㎝、底径8.6㎝、器高4.4㎝を測り、内堤と外堤を有する。硯面形態は平面型である。瓔を扁平にして、口縁部を硯面で遮蔽した形態をしている。体部肩部・中央部に櫛描波状文が巡る。体部肩部に直径15㎜の円孔が1つ穿たれている。体部中央に摘みが1つ有り5㎜の小孔が穿たれている。底部は手持ち篦削りされている。かなり丁寧な造りである。坏皿型硯の一類型とも考えられるが、独自の形態と考えたい。手付有孔中空円面硯(瓔型硯)とする。7世紀中葉ないし前半に遡ると考えられる。もう1点(55-4)はSK2079などから出土した。口径

15.5cm、底径10.5cm、器高6.9cmを測り、内堤と外堤を有する。硯面形態は凹型で、使用痕が顕著である。高台付坏の口縁部に硯面を貼ることにより遮蔽し、内部を中空にする形態をしている。圏脚部には不整方形の透かしが4単位穿たれる。体部下半は回転篦削りされている。坏皿型硯の一類型である。7世紀末ないし8世紀初頭と考えられる。

圏脚円面硯は8点ある。(55-5)は、SK2079から出土した。口径20cmを測り、内堤と外堤を有し、突帯が巡る。硯面形態は凸型である。使用痕が顕著である。圏脚部は破損しているが、やや開く形態と考えられる。篦描きの縦位沈線文が巡る。造りの丁寧な大型品である。大阪陶邑KM51や平城京、仙台市郡山遺跡などに類例がある。7世紀末から8世紀初頭と考えられる。(55-6)は、SE1733から出土した。口径10.8cmを測り、内堤と外堤を有する。硯面形態は凸型である。使用痕が顕著である。圏脚部は破損しているが、篦描きの縦位沈線が巡る。(55-7)は、SX1850から出土した。口径19.5cm、底径21.5cm、器高7cmを測り、内堤と外堤を有する。硯面形態は凸型である。圏脚部には方形の透かしが4単位穿たれている。大型の優品である。大阪府陶邑TG64出土品に似、7世紀前半の可能性がある。(55-8)は、SX2084から出土した。口径8.5cm、底径13.3cm、器高4.2cmを測り、外堤のみを有する。硯面形態は平面型である。圏脚部には縦楕円形の透かしが5単位穿たれている。篦描きで圏脚部上下に巡る横位沈線と、それに挟まれた縦位沈線が巡る。8世紀中葉と考えられる。(55-9)は、SX1973などから出土した。口径19.4cmを測り、外堤のみを有する。硯面形態は凸型である。圏脚部は破損しているが、円孔が穿たれ、篦描きで縦位沈線が巡る。(55-10)は、圏脚部の小破片である。篦描きの縦位沈線がある。(55-11)は、圏脚部の破片である。底径21.2cmを測る。(55-12)は、圏脚部の破片である。底径16.6cmを測る。縦長方形の透かしの痕跡がある。篦描きで圏脚部下部に巡る2条の横位沈線と縦位沈線が巡る。

なお、高畠町屋代の亀ヶ森において圏脚円面硯片が採取されているといわれるが、確認することができず詳細は不明であったので、集成からは除外した。

山形県内出土円面硯について概略を述べた。実見できたものは3分の2程であり、他は報告書や写真などの観察によるものである。したがって記述や記録に誤りが多々ある場合があり、あらかじめお断りしておく。

県内で円面硯を出土した遺跡は、前述したように20遺跡であり、そのうち集落跡が半数以上の11遺跡を占め、次いで生産地である窯跡が6遺跡となり、いわゆる官衙・官衙関連遺跡からの出土は少ない傾向が窺える。しかし、集落跡から出土する円面硯が多数を占めることが、8世紀代の識字層の広がりを物語るものとはいえないのである。ここで問題となるのは、円面硯が出土する集落跡の性格付けである。通常、遺構や遺物などからはっきりと官衙とされる場合を除き、集落跡とされてきた場合が多い。したがって今後は、円面硯を出土する遺跡、特に集落跡の歴史的性格の位置づけが必要になってくる。しかし、従来は土器研究に重きが置かれ円面硯は特殊稀少遺物として、県内では研究が進まなかったのが現状である。今後、大規模な発掘・出土遺物の見直し等によって円面硯の出土数がさらに増加し、集成が進み分析が行われること

により、それらの課題を明らかにしなければならない。

県内で出土する円面硯は、概ね7世紀中葉から9世紀初頭と考えられる。これは他県における状況とほぼ一致している。しかし、中空円面硯など一部に7世紀前半に遡る可能性が伺えるものもあり、今後分析を進め検討しなければならない。

円面硯が出土する遺跡の分布については前述しているが、出土遺跡を地図にプロットしていく作業を進めていくうちに特徴的な事柄が浮かび上がってきた。それは、山形県内において奈良時代の郡衙とされる地点と円面硯出土遺跡とが強い相関関係にあることである。後掲の山形県内円面硯出土遺跡分布図を見ると、特に置賜地方と飽海南部地方にその傾向が強くあらわれていることがわかる。また、出土円面硯は、置賜地方のものが概ね古く7世紀後半から8世紀前半、飽海南部地方のものがやや新しく8世紀前半から後半以降という様相が見られる。したがって置賜地方においては、日本書紀持統3年(689年)優嗜曇郡城養蝦夷脂利古云々の記述のある優嗜曇郡衙あるいは優嗜曇柵との関連性を視野に入れる必要があり、さらに、置賜郡衙が高畠町小郡山から南陽市郡山、米沢市大浦B、川西町道伝と移転したという説に対し、移転の時期や移転の有無等について再検討を求めることになる可能性を持つ。また、庄内地方においては、飽海郡衙との関連が考えられてくる。すなわち飽海郡衙は、円面硯が集中する平田町桜林興野遺跡から酒田市生石2遺跡を中心とする地域の可能性が指摘されるのである。城輪柵跡からは前述したように、鳥形の形象硯1点(頭部)と風字硯と転用硯のみの出土であり、円面硯の報告は皆無である。

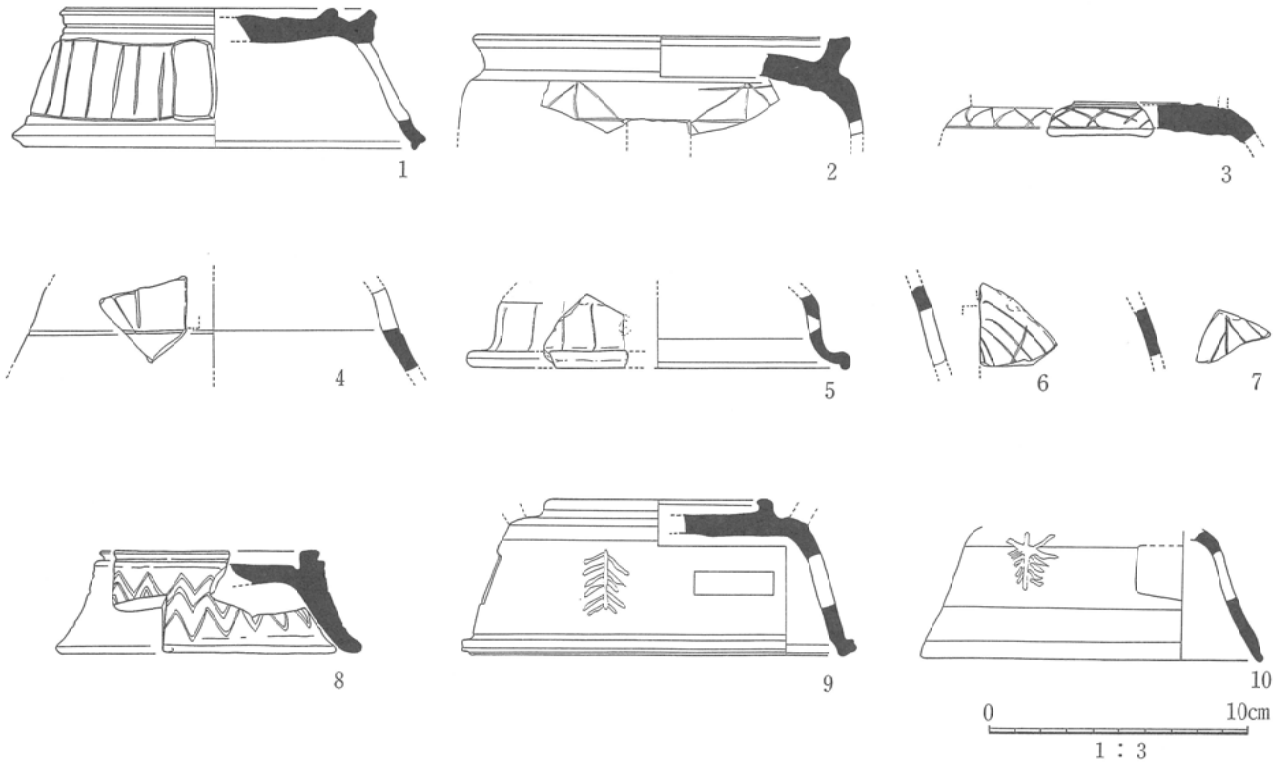
さらに初期出羽郡衙あるいは出羽柵との関連では、唯一円面硯が出土する鶴岡市荒沢窯跡が重要になる。おそらく初期出羽郡衙あるいは出羽柵は、従来唱えられていた藤島町平形遺跡付近ではなく、むしろ荒沢窯跡に比較的近い平野部、あえて言えば鶴岡市大山近辺に存在する可能性が強いものと考えることができる。とすれば、8世紀中葉頃と考えられる酸化焔焼成の土器(秋田城出土の赤褐色土器に先行するもの)の坏類や須恵器稜椀写しである土師器（内面黒色処理）の稜椀などがまとまって出土している鶴岡市北西部に所在する西谷地遺跡が注目されるのである。ここでは「左」と墨書された土器が64点出土しており、墨書土器全体の半数を超える。秋田城では「佐」と墨書された土器が見られ、「すけ」と読んでいる。仮に、西谷地遺跡出土の「左」が「すけ」と読むことが可能であれば、初期出羽郡衙あるいは出羽柵が鶴岡市大山近辺に所在するという考え方の1つの傍証とすることもできよう。さらに、西谷地遺跡に隣接する五百刈遺跡からは平成5年の調査の際、「岐」銘の墨書土器が2点出土している。都岐沙羅柵に何らかの関連があることも考えることができるが、遺物は9世紀代に属するものである。しかしながら、山形県内では8世紀の遺跡の調査例が極めて少ないのが現状である。特に庄内地方南半では、鶴岡市南西部に所在する月記遺跡の河川跡下層から出土した回転ヘラ切りの須恵器坏の一群が唯一である。都岐沙羅柵・出羽郡衙・出羽柵・出羽国府など、律令制の進展に伴い日本書紀などの史料に記載される、官衙施設や領域などに関し未だ定説はないのが現状である。平成8年度から鶴岡市教育委員会により大規模な発掘調査が進められている、大山地区南部に広がる山田遺跡が注目される。今後資料の蓄積がなされることにより、当該期の出羽南

半の様相が明らかにされることに期待したい。

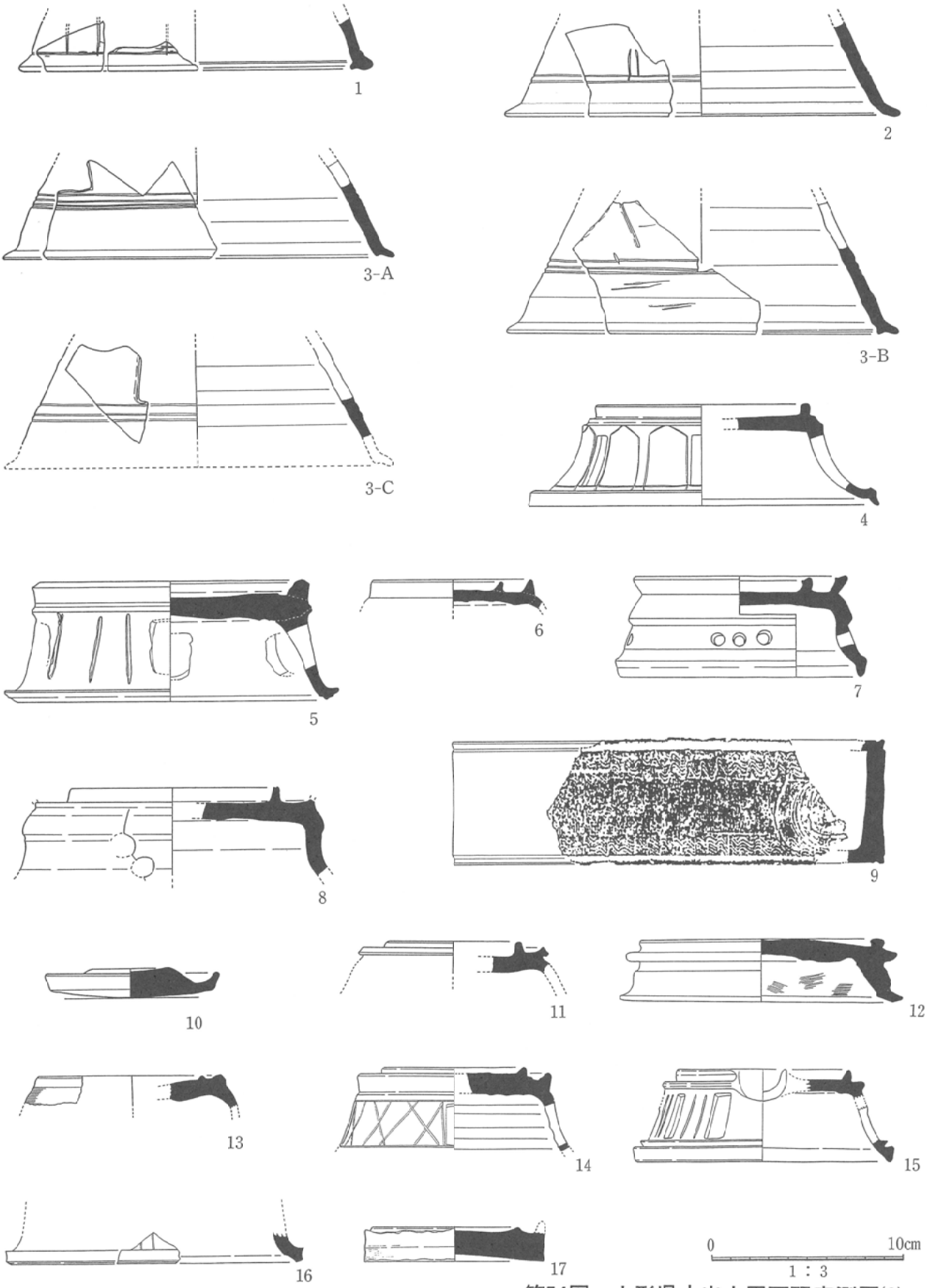
また、円面硯を出土する窯跡と他の円面硯出土遺跡との相関も強いものがあると考えられる。生産施設と消費地という関係のみならず、官窯と官衙および官衙関連施設、あるいは窯跡と国分寺などの寺院という結びつきも視野に入れなければならないのである。円面硯が出土した前述6窯跡の胎土と県内出土円面硯の胎土を詳細に分析し、あわせて県内の窯跡との比較を行うことにより、円面硯生産とその消費の関わりを明らかにすることが必要である。

今回、山形県内出土円面硯について具体的な年代観を与えているのはごく限られた数にとどまってしまった。実見できなかったものや、記録不足によるものであるが、たぶんに勉強不足によるところが大きい。今後、発掘調査の進展により円面硯の出土例が増加することにより、さらに研究が進むことに期待したい。

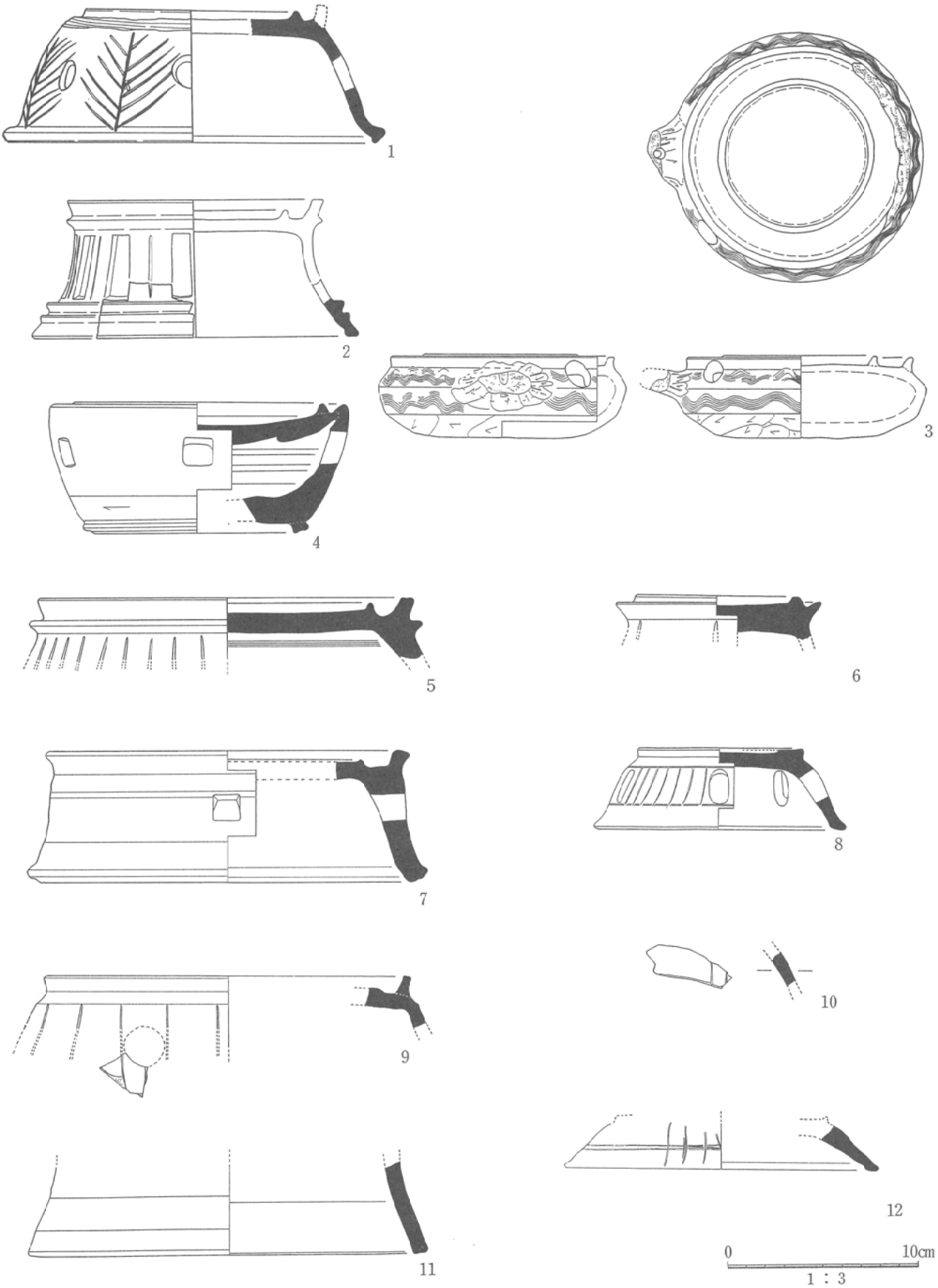
山形県内出土円面硯



第53図　山形県内出土円面硯実測図(1)



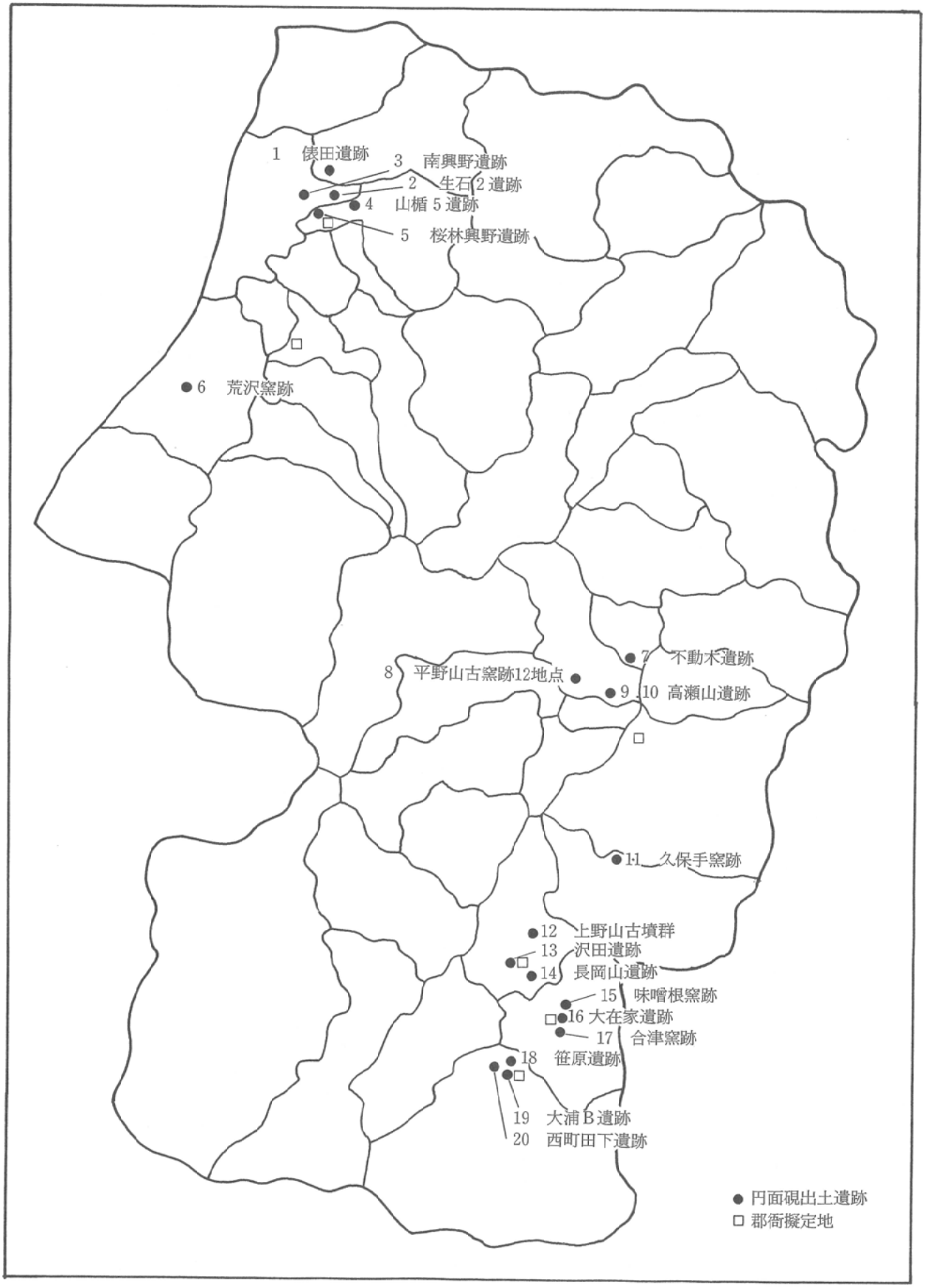
第54図　山形県内出土円面硯実測図(2)



第55図　山形県内出土円面硯実測図(3)

山形県内出土　円面硯集成表

No.	出土遺跡	市町村	種別	挿図No.	器種	硯面形態	口径	器高	底径	透かし孔	圏脚形態及び備考	出土地点
1	俵田遺跡	八幡町	集落跡	53-1	圏脚円面硯	内堤，外堤有り　平面型	125	55	16	縦長方形	篦描きで縦の沈線	グリッド
2	生石２遺跡	酒田市	官衙関連	53-2	圏脚円面硯	外堤のみ　山型	146			縦長方形	篦描きで菱形沈線文	グリッド
				53-3	圏脚円面硯	内堤，外堤(欠損)有り　平面型	90			不明	肩部に篦描き格子沈線文	表採
				53-4	圏脚円面硯	不明				縦長方形	篦描きで斜線と平行沈線	グリッド
				53-5	圏脚円面硯	不明			146	円孔	篦描きで縦の沈線	グリッド
				53-6	圏脚円面硯	不明				縦長方形	篦描きで斜格子沈線文	グリッド
				53-7	圏脚円面硯	不明				不明	篦描き木葉状沈線文	グリッド
3	南興野遺跡	酒田市	集落跡	53-8	圏脚円面硯	外堤のみ　凸型	85	39	120	無し	篦描きで連続山形沈線文３条	包含層
4	山楯５遺跡	平田町	窯跡	53-9	圏脚円面硯	内堤、外堤有り（欠損）　平面型				横長方形と方形２対	篦描き木葉状沈線文	
				53-10	圏脚円面硯	不明				横逆台形	篦描き木葉状沈線文	
5	桜林興野遺跡	平田町	集落跡	54-1	圏脚円面硯	不明				不明	篦描きで縦の沈線	グリッド
				54-2	圏脚円面硯	不明					下部に篦描きで２条の沈線	グリッド
				54-3	圏脚円面硯	不明				縦長方形と菱形	下部に篦描きで３条の沈線	グリッド
6	荒沢窯跡	鶴岡市	窯跡		不明	不明				不明	不明	不明
7	不動木遺跡	河北町	集落跡	54-4	圏脚円面硯	外堤のみ　平面型	106	53	184	縦長方形	篦描きで縦長五角形と１条の沈線	グリッド
8	平野山古窯跡12	寒河江市	窯跡	54-5	圏脚円面硯	外堤のみ　平面型	140	64	178	縦不整方形６単位	篦描きで縦の沈線	灰原　N,M-30
				54-6	圏脚円面硯	内堤、外堤有り　平面型	84			不明	不明	XO
					圏脚円面硯	外堤のみ　平面型	100			不明	不明	M-30
					圏脚円面硯	内堤、外堤有り　平面型	105			不明	篦描きで縦の沈線	K-30
					圏脚円面硯	内堤、外堤有り　平面型	135			不明	不明	O-30
					圏脚円面硯	内堤、外堤有り　平面型	165			不明	不明	F-31
9	高瀬山遺跡Ⅰ期	寒河江市	集落跡	54-7	圏脚円面硯	内堤、外堤有り　平面型	114	53	130	7mmの円孔３個　４単位		SK1015
10	高瀬山遺跡市道	寒河江市	集落跡	54-8	圏脚円面硯	内堤、外堤(欠損)有り　平面型	150			10mmの円孔		
11	久保手窯跡	上山市	窯跡		圏脚円面硯	不明				不明	不明	燃焼部
12	上野山古墳群	南陽市	古墳	54-9	中空円面硯	外堤のみ　平面型　把手付提瓶型カ				無し	体部上下端および底部端部に櫛書波状文　把手剝離	石室内
13	沢田遺跡	南陽市	集落跡	54-10	無脚円面硯	外堤のみ　凸型	95	15.5	90	無し	無し	包含層
14	長岡山遺跡	南陽市	集落跡	54-11	圏脚円面硯	内堤、外堤有り　平面型	96			不明	不明	表採
15	味噌根窯跡	高畠町	窯跡	54-12	圏脚円面硯	外堤のみ　凸型	130	36	144	無し	無し	２号窯跡
				54-13	圏脚円面硯	内堤、外堤有り　凹型	100			不明	不明	２号窯跡
16	大在家遺跡	高畠町	集落跡	54-14	圏脚円面硯	内堤，外堤有り　平面型	98			縦長方形	篦描きで格子状沈線と上下に１条沈線	表採
				54-15	圏脚円面硯	外堤のみ　墨溜まり状部分貼付　平面型	90	49	134	縦長長方形	篦描きで縦の沈線	グリッド
				54-16	圏脚円面硯	不明				不明	篦描きで縦の沈線	グリッド
17	合津窯跡	高畠町	窯跡		圏脚円面硯	内堤、外堤有り　墨溜まり状部分貼付　平面型	170				篦描きで３状の連続山型沈線文	
					圏脚円面硯	内堤，外堤有り　平面型	170			縦長方形	篦描きで縦の沈線	
18	笹原遺跡	米沢市	集落跡	54-17	無脚円面硯	内堤，外堤(欠損)有り　平面型	95	18				ST8住居跡
				55-1	圏脚円面硯	内堤，外堤有り　平面型	138	70	220	17mmの円孔	篦描きで木葉状沈線文	SD3溝跡
					不明	不明				不明	不明	SD7溝跡
19	大浦B遺跡	米沢市	官衙		圏脚円面硯	不明				円孔		
				55-2	圏脚円面硯	推定復元			175	縦長方形	篦描きで縦の沈線	DY146土坑
20	西町田下遺跡	米沢市	集落跡	55-3	中空円面硯	内堤、外堤有り　平面型　紐部分に5mmの小孔	118	44	86	肩部に15mmの円孔	肩部及び体部中央部に櫛書波状文　手付有孔中空円面硯	SK2079
				55-4	中空円面硯	内提、外提有り　凹型	155	69	105	不整方形　４単位	高台付坏に似た圏脚部に硯面を貼る中空円面硯	SK2079 SD1505 SG1.2 SE1733
				55-5	圏脚円面硯	内堤、外提、突帯有り　凸型	200			不明	篦描きで縦の沈線	SK2079
				55-6	圏脚円面硯	内提、外提有り　凸型	108			不明	篦描きで縦の沈線	SE1733
				55-7	圏脚円面硯	内提、外提有り　凸型	195	70	215	方形　４単位	体部上下部に各一条の沈線	SX1850
				55-8	圏脚円面硯	外堤のみ　平面型	85	42	133	縦楕円形５単位	篦描きで縦及び上下に一条の沈線	SX2084 SP2082 SK2273
				55-9	圏脚円面硯	外堤のみ　凸型	194			円孔	篦描きで縦の沈線	SX1973 O-12
				55-10	圏脚円面硯	不明				不明	篦描きで縦の沈線	SG1.2
				55-11	圏脚円面硯	不明			212	無し	無し	SG1.2
				55-12	圏脚円面硯	不明			166	縦長方形	篦描きで縦及び下部に２条の沈線	グリッド



第56図　山形県内円面硯出土遺跡分布図